

Newsletter



附属学校ニュースレター

第16号・2013年 冬

創立100周年を祝う

奈良女子大学附属幼稚園は昨年11月3日に100周年記念式典を行いました。2009年から順に大学、附属中等教育学校、附属小学校が100周年を迎えていき、附属幼稚園の100周年をもってすべての校種が100周年を迎えました。

幼稚園には同窓会という組織がありませんので、現役の保護者の方々の協力が不可欠です。そこで、百周年記念事業実行委員会を立ち上げ、保護者の方々とともに、幼稚園らしい手作りの記念式典や記念行事を計画し、準備をしてきました。

当日は、秋晴れのお天気に恵まれました。50人余りのお客様を迎えて幼稚園の遊戯室で記念式典を行いました。子どもたちは野口誠之学長、阿久津好二育友会長の式辞や出席してくださったお客さまの紹介をうれしそうに聞いていました。



式典後、保護者の方に加わっていただき、園庭で「ようちえんのおたんじょうび会」を行いました。おた

んじょうび会では、附属中学校・高等学校・奈良女子大学の出身者であり、附属幼稚園の先生もして下さっていた坂口紀代美先生作の100周年記念碑「なかよしの木」の除幕式を行いました。



その後、各学年の園児の歌やダンスの発表を行ったあと、全員で風船飛ばしをしました。風船は風に乗って遠く静岡まで飛んでいきました。青空に色とりどりの風船が舞い上がる美しい光景がきっと子どもの心に残り続けることでしょう。



おたんじょうび会后、「おたんじょうびパーティ（親子で会食）」をして、午後には附属小学校において附属中等教育学校器楽部とマリン

附属幼稚園

バ奏者の松本真理子さんによる記念コンサートを行いました。器楽部のお兄さん、お姉さんの演奏で園歌「だいすきようちえん」を歌ったり、マリンバの曲にのって体全体でリズムをとったり、存分に音楽を楽しみました。



記念コンサート後のレセプションでは、中島道男副学長からご挨拶をいただき、歴代の園長、副園長先生方に、附属幼稚園の教育の伝統や幼児教育への熱い思いを聞かせていただきました。100年もの長い間附属幼稚園が存続してきたのは、いつの時代も変わらぬ元気な子ども達、諸先輩方のよき実践、保護者の温かいご協力、大学の支援、そして卒園生の附属への熱い思いがあったからこそと実感しております。これまでの伝統を引き継ぎ、現代のニーズに応じた、そして未来へつなげる幼稚園教育を推進していきたいと思ひます。



韓国教員研修・韓国教育事情

附属中等教育学校 藤野智美

附属中等では、近年、海外での教員研修を積極的に行っています。その一環として、私は10月23日から約1ヶ月半韓国に滞在し、様々な学校や教育機関を訪問しました。皆さんは、韓国の教育と言われると、どのようなことをイメージされるでしょうか？教育熱心な国として知られる韓国ですが、こと私の専門である科学分野においては、国をあげた英才教育が行われています。量子力学などの大学レベルの授業を実施する科学高校や、選抜された学生を集めて指導が行われる英才教育院など、その内容は多岐にわたります。また、国内外をあわせた大学進学率が日本以上に高く、大学入試や就職に関する競争が激しいことも特徴の1つです。そのような環境の中で、生徒や教師が何を感じているのか。そして、日韓の教育を比較したとき、どちらがどのように優れているのか。この2つの問いを念頭におきながら研修を進めていきました。

日韓の教育を比較したとき、様々な共通点がある一方で、多くの相違点が見られます。24時で終わる高校の校時

表や、浪人が認められにくい風潮など、日本では想像できない状況を目にすることもしばしばです。英才教育ひとつをとっても、「能力のある生徒のための特別な教育」は、日本で一般的な「平等な教育」とは逆の性格をもっており、韓国と日本の教育は相容れないのではないかと感じる部分もあります。では、そのような背景を持つ国で教員研修を行う意義は何なのでしょう。今回の研修を通して、その答えの糸口を見つけることができました。

韓国に長く滞在すると、この国の持つ文化や人々の価値観が、日本とは違うということを肌で感じるができます。日本と韓国のどちらが良いというわけではなく、日本とは異なる個性として存在しており、その個性の違いが教育の違いを生じていることを実感できます。例えば、韓国の授業では、多くの生徒が自分の意見を自発的に発言し、静まりかえった授業をあまり見かけません。とてもうらやましく思った私がその理由を学生に問うと、多くの時間を集団で過ごし、その中で自分の意見を明示することが良いと考える

韓国人の国民性ではないかと教えてくれました。教育の違いを捉えるとき、その背景にある文化や価値観の違いを認識しなければ、単純に比較・評価はできないことを実感する瞬間でした。

この研修中、私にとって最も有益だったことは、このように新しい価値観を得る機会を様々な人とのやりとりの中から見出せたことです。学生や教師、保護者や韓国人の友人など、多くの方々と教育について話す中で、日本と韓国の教育を見つめなおし、自分の価値観を磨いていくことができました。互いの違いを共有し、抱える悩みについて共に考えながら、「理想の教育とは何だろうか？」という話を行った時間が、私にとって一番の財産になりました。異なるものと向き合うことで、自分の価値観が広がり、気づかなかった視点を獲得できる。これこそがこのような研修の醍醐味だと思います。このような機会を与えてくださった多くの方々に深く感謝し、今後の活動に励んでいきたいと思っています。(この教員研修は、「教員養成機能の充実」プログラムの1つです。)



子ども同士を繋げ、成長を見守る養護教諭を目指して

附属小学校 城本知容

子どもの様子を見ていると、同じ事物を目前にしても、物事の捉え方が異なる事があります。例えば、夏の暑い朝の事でした。1本の木を見上げている子ども達が目に留まりました。しばらく様子を見ていると、次のような会話が聞こえてきました。



「ここには虫がいないみたい。」「そうかな、この木は樹液が出ているから、もしかしたらクワガタが来るかもしれない。」このように、経験の異なった者同士に於いては、一本の木を巡って異なる捉え方をします。そして、その結末は、物事の連続性と関連性をもって主張する子どもの考え方に導かれます。

このように、子どもが成長する過程においては、友だちとの相互作用が必要不可欠です。では、養護教諭は子どもの成長に対して、どのような支援が出来るのでしょうか。

養護教諭は、担任や教職員との連携のみならず、子ども達の理解者として、子ども同士の関わりを見守る事が出来ます。また、子どもとのコミュニケーションを通して、子どもの思いを受け止め、それを学校全体に広める事も出来ます。



以前、6年生と以下のような会話を交わした経験がありました。

養護教諭：「これから寒い時期に入るから、病気についての掲示物を作ろうかと考えているのですが、みんなは病気について、どんな事が知りたいですか。」

6年児童：「先生、それをみんなに聞いてみたらどうですか。」

その返事を聞いて、私は猛省しました。これまで養護教諭の使命は、子どもに自分の思いや考えを明確に伝え、適切かつ効果的に指導する事が最も重要であると考えていたからです。しかし、それでは子どもの思いを受け止め、子どもの成長を促す事にはなりません。そこで、反省を生かすために、テーマに沿った会話や一人一人の思い、知りたい事や不思議に思っている事などを自由に書き込めるように工夫した掲示物を作成し、保健室前に掲示しました。子ども達からの書き込みを読んでみると、暮らしの中で起きている問題や、以前から気になっている事など、内容は多岐に渡るものでした。そして、その内容に、教師である私と子どもとの間に、大きな差異がある事を痛感させられました。しかし、これらを教師が解決しては、子どもの解決能力と子ども同士の繋がりを希薄にしてしまいます。そこで、暮らしの中で起きている問題や、以前から気になっている事など

に対して、それを読んだ子どもからアイデアや示唆を書き込める欄を追加し、子ども同士の相互作用を積極的に導入しました。すると、書き込む人や返事を書く人に加えて、書き込んだ人とそれを説明する人のやり取りが生まれるようになりました。このように、子ども



は、問題や気になることを解決するために、創造的な思考や経験を活用し、コミュニケーションを図りながら、友だち同士の意識の高まりを見せてくれました。

以上の事から、養護教諭は、暮らしの中で生じている問題を、子ども達が学級や学年を越えて学校全体に広める事で、子ども同士の相互作用を活発にし、子ども達が自分らしく成長するための支援が可能になると考えます。



新しい日々での出会い

附属幼稚園 津村樹理

今年度4月より新しく附属幼稚園に着任し早9ヶ月が過ぎようとしています。これまでの他園、他国での幼児教育との関わりから多文化や多様性などに少しは触れてきたつもりではあるものの、環境が変わればこんなにも違うのかと今までとは一転した初めての附属園や奈良での人や自然、出来事等との出会いの繰り返しは、毎日が新鮮で小さな異文化体験(?)を楽しんでいます。ただ、子どもは同じ、その成長する環境が違い、育ち方が変わってくるものの、その本質は世界共通ではないかと考えています。だからこそ、人としての人格形成に重要なこの時期の環境の一部でもある保育者として、子どもと関われる喜びと幼児教育の責任と重要性、そして興味深さ・奥深さに改めて気付かされると共に再確認させられています。

多くの方に支えられご指導頂き、刺激的で学ぶ事の多いこの恵まれた環境の中で生かされている事に感謝しつつ、ワークライフスタディバランス(造語です)を保ち、今後も努めていきたいと思っています。そして、子ども同様に様々な経験を積みながら、私自身も子ども達に負けないうくらい体を動かし心をふるわせ頭を働かせて、魅力ある教育者としても一人の人間としても、まだまだ成長していきたいなと思っています。



できる存在だと信じること

附属小学校 服部真也

平成24年4月より、公立の小学校から附属小学校に参りました服部真也です。これまで当たり前に行ってきたことが、本当に子どもたちのそだちにつながっているのかということを問いながら、自分自身の教育観が少しずつ変化するのを感じつつ過ごしてきました。その中で大切に毎日過ごしている言葉があります。先輩の先生言葉です。「子どもができないものだと思えば、教えようとする。子どもをできる存在だと思って信じれば、支えようとする。」

4星の子どもたちの今いちばん大切にしていることは、「なかよし」です。39人全員が真につながれるように、単に取り組みをするのではなく、その取り組みをする意義や、それを通してどうなりたいかというビジョンを持てるように育ってきました。日記や聴き合い、普段の言葉のやりとりから、子どもたちは友だちとつながろうとがむしゃらにがんばっているんだと感じられます。変わろう、育とうと一生懸命になる子どもたちを、真に支えられる、熱い思いを持ったあたたかい教師に私も育っていきたく強く思います。



新任として切磋琢磨する日々

附属中等教育学校 大森雄一郎

今年度、新任教員として教科・学年・分掌・部活動と初めての経験ばかりながらも、本当に充実した日々を過ごしています。

公開授業を担当した公開研究会では、厳しいながらも愛情溢れる多くの言葉を頂きました。その中で最も印象に残っているのは「本質を伝えているか、常に自分に問い続けなさい」の一言です。言われた時は本当に悔しく、本質って何だと言いつ返したくもなりましたが、翌日冷静になって自分の授業を振り返り返してみると「正しいとされる形を生徒に押しつけ、何を本当に伝えたいのかの問いが自分には足りていなかった。伝えるべきは形だけではない。」ことに気付かされました。以降、問いを持って授業に臨むよう心がけています。

本質を如何に伝えるのか、これから常に考え続けながら、本校保健体育科教員としての道を歩んでいきたいと思っています。